とある男の、のんきな日常

気が向いたら書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある男の、のんきな日常

【Ｎコード】
Ｎ３６３８Ｖ

【作者名】
気が向いたら書く人

【あらすじ】
これは、平凡な会社員と
アンドロイドの
平凡な日常を綴った
物語である。

（趣味で書いているので、
あまり一般受けせず、面白くなかったり、更新を一年以上しなかっ

たりします）

～朝食～（前書き）

これは、私のごく個人的な
趣味で書いてます。

一般受けはしないでしょうし、私はそれでも構いません。

それでも読まれる方は、
以上の注意事項をしっかりと
頭に置いてご覧ください。

～朝食～

―――これは、
とある一人の男性の
長閑な日々の日常を書いた物語だ―――

「ご主人様、ご主人様
起きてください
朝になりましたよ」

私の一日は、
彼女のこんな呼びかけから
始まる。

『うぅ～ん』

まだ眠たくて動きが鈍い身体を
ノロノロと、動かし背を起こす。

「おはようございます、ご主人様（マスター）」

『おはよう』

寝起きで、
動きが鈍い頭を起こし、
私は翡翠に返事をした

「すでに朝食の用意は出来ております。　お着替えはこちらに置いておきますので、着替えてからおこしください」

そう言って
サイドテーブルの
上に置かれた
綺麗にたたまれた衣服を示し、
彼女は
この部屋を出て行った……

彼女は
私の勤める会社の
家庭用アンドロイド製作部門が不祥事を起こし、

製作プロジェクトが
一時中止となり、
行き場もなく
維持も大変なため
廃棄されるところを

私が会社から買い取った
アンドロイドである。

『やれやれ、共に暮らし初めて1ヶ月は経つが、
相も変わらず素っ気ない』

私はそう呟きながら、
着替えてダイニングへ
向かった。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

「主人様、
今日のお飲み物は
コーヒーになさいますか、
紅茶になさいますか」

私がテーブルの椅子に
座ろうとすると、
椅子を引きながら
翡翠が尋ねてきた。

『今日はコーヒーを貰うよ』

私はそう答えて
朝食を食べ始めた。

～朝食～（後書き）

これからも
ほのぼの・のんびりとした、

山場も、落ちもないような
そんな小説をマイペースに
思いついたら書いていきたいと思います。

～一日、その後～（前書き）

これは、完全に趣味で書いてます。

～一日、その後～

私は朝食を食べ終え、
出勤の準備をしていた。

『これでよしっと』

その支度も終わり
今からでるところだ。

玄関を出る時に彼女が
「行ってらっしゃいませ」
と見送ってくれたので

私も
『行って来ます』
と答えて出勤した。

――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

仕事を終え、
只今６時３０分
今から帰るところだ。

真夏とは言わないが、
それでもシャツの背中が
汗ばむ　暑さに辟易しながら、人の多い電車に乗り、
帰宅の途につく。

家につき、
玄関に入ると

「お帰りなさいませ」

と彼女が出迎えてくれたので

『ただいま』
と一言返した。

いつも思うのだが、

なんで帰って来る時間が
わかるかのように
こう出迎えられるのだろう？

いつも同じ時間に
帰るわけではなく
いつも結構ばらばらな
時間帯に帰るのだが。

じっ　と見つめてみても
彼女の変化の薄い表情に、
浮かんでいるのは

いつもの　凛とした、
どことなく冷たく感じる
無表情に近い顔だった。

「何か、ご用ですか？」

そんな風に彼女を
見つめていると
その視線が気になったのか、
軽く首を傾げて聞いてきた。

彼女の首を傾げる動きに

合わせて流れる
長い、烏の濡れ羽の様な髪に
　視線をやりながら、
『いや、何でもないよ。　其れより夕食　よろしく』
　「畏まりました」
私はそのまま階段を上り
部屋へ向かった。
————————————————————————
————————————————————————
部屋に入って
クロゼットの中に
ジャケットを吊し、
ホワイトシャツを
洗濯物としてだし

動きやすい部屋着に着替えた。

私がしばらく
書斎で本を読んでいると、
彼女がノックをして
入ってきた。

「失礼します」

「夕食のご用意が出来ました。遅れてしまい申し訳ありません」

言われてみて
ふと時計を見ると、
只今午後８時１０分
しかし、家自宅についたのが
少し遅くなり
７時４０分頃だったので、
十分許容範囲内だ。

『別にいいよ…じゃあ、いこうか』

そして、二人でダイニングへ
向かった。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

『今日も美味しかったよ』

夕食を食べ終え
彼女に礼を言って
食休みをする。

彼女が淹れてくれたお茶を
飲みながらデザートの
蕨餅を食べる。

彼女はありがたい事に、
私が和菓子が好きだと
言ったその日から
食後のデザートとして
偶には洋菓子の場合も
あるが、
だいたい和菓子を用意して
くれるようになった。

今回のように食事の準備が
少しだけ遅くなった日や

休日の3時、
彼女の機嫌が何となく
良さそうに見える日などに、
手作りのデザートが出るので
私は、少しだけ食べるのを
楽しみにしているのだ。

『ごちそうさま』

私はデザートも食べ終え
彼女に一声かけて
風呂へと向かった。

～お風呂と回想～

家の風呂は大きい。

流石に温泉並み
というほどではないが、
それでも、個人の持つ
風呂にしては、
十分以上に広いだろう。

何故なら死んだ祖父母が
（特に祖父）風呂好きで、
祖母の暁子（あきこ）を
祖父、龍雄（たつお）が
半年かけて説得し、
3ヶ月かけて造らせた
秋月家自慢の風呂なのだから。（祖父母の姓は柊ではなく秋月である）

そんな自慢の風呂に
浸かりながらのんびり昔の
そう……、彼女と　翡翠と出会った日を思い出していた。

――――――――――――――――――――――――

回　想

――――――――――――――――――――――――

彼女と出逢った頃は、
もう春の気配が消え
初夏の足音が聞こえ
始めるころ頃、

まだ蝉達の合唱が
響き始める前だった。

その日は、
とある部署が暫く前に
大ポカをやらかし、
他部署の私達も何人か
残業で居残りをしていた。

私は不要になった書類を
シュレーダーにかけるためと、次の会議の資料を
コピーするため、
コピー室へと向かっていた。

不要書類をシュレーダーに
かけ終え、
コピー機の前で資料の
コピーが終わるのを
待っているとき

コピー室で立ち話をしていた
社員から
興味深い話を聞いた。

「ねーねー知ってる～」

「え～何のことですか」

「この前の、プログラムの欠陥やプロジェクトチーフの汚職やらで
潰れた家庭用アンドロイド販売計画のこと」

「あ～あれね、それがどうかしたの？」

「それが～実は計画中止になって計画で使われるために
仕入れた業務用の
アンドロイドが一体邪魔になって廃棄されるんだって」

「えーそれって酷くないですか」

「そうよね～いくらアンドロイドと言っても可哀想よね～」

その後も二人は色々と喋って
いたようだけど、
私は全く聞いていなかった。

個人ではまず手に入らない
業務用アンドロイドが
廃棄される！！

なんて勿体無い
それに、可哀想じゃないか、

現在巷で販売中の
家庭用ロボットと違い、
業務用アンドロイドは
しっかりとした自我や感情を
持った存在なんだ！

興奮して幼くなった
思考を暴走させコピー室から走り去り、

『部長！！！今日上がります！！』

初めて聞く柊の怒鳴り声に
目を白黒させている部長を
無視して、

プロジェクトを行っていた

部署に、俺は走り出した。

――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――

走り出てから7分で例の部署にたどり着いた、
走っている間に
少しは落ち着いたので
ゆっくり一言かけてから入る。

『失礼します』

その後の事情の説明や
取引の話などは、
割愛させてもらう。

とりあえず
彼女を引き取ることが
出来たとだけ言っておこう。

……たー……すたー……」

うん？

「…スター…ご主人様！！」

なんだ？
翡翠の声？

『翡翠か…どうしたのか？』

私はいつの間にか
眠ってしまったようだ
頭がぼーとする。

「どうかしたのか、じゃありません！　ご主人様は風呂でのぼせて
気絶したんです！」

『そうだったのか、翡翠、心配をかけてすまない　もう大丈夫だ』

そう言って身体を
起こそうとするが、

力が抜けてまたベッドに
倒れ込んだ。

『あ…あれ？』

「無理しないでください。　今ご主人様は脱水症を起こしています、
ほら、飲めますか」

そう言って、
水差しから水を飲ませてくれる

『む』
しょっぱくてあまい

「あまり、私に心配させないでください」

彼女がぽつり・・と呟く。

『すまない』

私には謝ることしかできなかった。

「もう、いいです」

『すまない』

そこから私の記憶がない。

意識が落ちるその瞬間、

何時もの冷たく見える
無表情な目の端に、
一粒のひかる雫が
見えた気がした。

～お風呂と回想～（後書き）

感想、制限外しました。

～回想その後～

『ん～』

ふと、目が覚めた、
夏が近づき気温が
上がってきたからか、暑い

寝間着として着ている
着替えた覚えのない
Ｔシャツがジットリと
湿っていた。

『暑いな、それに喉が乾いた』

しばし、ぼーっとして
頭痛をこらえていると、

ベッド脇に俯いて
寝ている（ＡＩ、駆動系などの休息）
彼女とサイドテーブルの上の
水差しを見つけ出し、

とりあえず喉が乾いていたので水差しから水を飲んだ。

『やはり甘い』

そしてしょっぱい。
なんなんだろうか？
この味は、
ふとそう思った。

ひとまず喉が潤ったようなので、
ベッド脇に寝ている翡翠に
目を向けた。

『久々に翡翠の寝顔をみた』

その前に見たのは、
起動前、マスター登録時なので
実質、翡翠になってからは
初めての事である。

その、珍しい寝顔を見ていると

『相変わらず、綺麗な顔をしているのである』

ぽつり…呟きが漏れた。

……変な口調になってしまった
私はこんなキャラじゃなかったはずである。

何故だろう？自分のことなのにいまいち自信が持てない
…いや、自分のことだからこそ自信がもてないのか。

……それもどうなんだろう？

そんなことを思いながら、
今日の感謝を込めて
彼女のサラサラとした
髪を梳くように、ゆっくりと
撫でる。

『ありがとう、そしてお休み』
そう呟いて
また私は
夢の世界へと旅立って行った。

～ある夏の日～

あの、のぼせた日から
二週間ほどたった夏の日のこと

『暑いな』

そう、暑い
もう7月の中盤
季節も夏に入りきり、
うだるような暑さがしている。
私は、急な休日出勤を終えて
家へ向かっている最中だ。

今は二時二十分、
上辺は何でもないように
振る舞っているが、

汗をだらだらかき
シャツが張り付く不快感と、
暑さそのものに対しての
憤りを押し込めながら、
イライラしていた。

『ただいま』

いつもの挨拶もお座なりに
早々に部屋に向かった。

『涼しい！』

自室に入るなり、その涼しさに驚いた。

少し疑問に思ったものの、
誰のお陰かは、すぐにわかった。

『翡翠か？』

ありがたい
彼女は、そういうところに
細かくきずき、気が回るので
今までも、色々と助けられている。

汗臭い服を着替えながら、
そのようなことを考えていた。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

着替え終えて、
ダイニングに降りると
彼女がおやつらしき物を
作っているのを見て
一言礼を言う。

『翡翠、クーラーをつけておいてくれてありがとう』

「いえ、なんということではありません」
「もう少しで、葛切りが出来ます。もう暫くお待ち下さい」

今日は葛切りか
夏にはちょうどいいな

『ああ、わかった』

とりあえず私は
待っている時間を潰すため、

ソファーに深く腰掛け
小説を取り出して
いつものように
読書を始めた。

「ご主人様、葛切りが出来ました」

本を読み始めて２０分位経った頃、彼女がそう、声を掛けてきた。
私は読んでいた小説に
しおりを挟み、
ソファーの前のテーブルに
置いて立ち上がった。

『うん、いつも翡翠の料理は美味しいですね』

私がそうやって彼女を褒めると
彼女は
「ありがとうございます」
と、いつもの表情の乏しい顔で頭を下げた。

う〜ん、相変わらず表情が
よみずらい。

うっすらと浮かべては
いるんだが、彼女の凜とした表情がそれを隠してしまう。

その後も、私がたまにぽつぽつと彼女にしゃべりかけ、
それに彼女が律儀に応える
という会話をしながら、
少し涼しくなったある日の、
夏の午後を
のんびりと過ごした。

～ある夏の日～（後書き）

流れも、ストーリーも、考えずに書いてきたが、
脳内のネタが切れてきた。

～ある夏の日？～《朝食前》

ある夏の日
仕事もないので
私は読みたい本を
夜遅くまで読んでいた。

『眩しい、朝か？　今何時だ？』

いつの間にか夜が明けたらしい
時計を見るとまだ午前６時、
平日ならば
もう起きなければいけない時間帯だが今日は休日だ
しかし、いまから寝る気分でもなかったので
起きることにした。

『む　眠い、　少し夜更かしが過ぎたか』

私はそうぼやきながら
ゆっくりと起床の準備を
始めた。

「おはようございます。ご主人様」

私がリビングに向かう途中
彼女とすれ違った。

『おはよう』

軽く挨拶を返しそのまま
リビングに向かった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

まだ朝飯が出来てないはずなので、
今日もリビングで
本の続きを読んで、ゆっくりと朝食の準備が整うのを待った。

やはり私は本を読むのが
好きなのだろう。

その中でも特に、
物語が好きだ。

フィクションであろうと
ノンフィクションであろうと
その中には
私の現実にない世界が、
内包されている。

その本の中の世界を読んでいくことで私は、
その新しい世界を
触れて、体験し、知っていく。

そして物語の中で
いろんな刺激を体感していく。
それによって私は、
穏やかで、大変で
そして、辛いことも多い、
『素晴らしい現実』で
活きていく英気を養うのだ。

「ご主人様、朝食の用意が整いました」

彼女のそんな一言を聞き、

私は、そんな風に
取り留めなく思考の赴くままにたれ流していた戯れ言めいた思考を

停止し、

ゆっくりと立ち上がり
ダイニングルームへと
向かった。

～とある夏の？～《朝食その後》

朝食を食べ終え、
私は今日１日を
何をして過ごそうか考えていた

『う～む』

何をしようか、思いつかない
今日しなければいけないことは何かあっただろうか？………無かったはずだ。

とりあえず翡翠を連れてどこかに出かけてみるか。

『翡翠』

朝食の片付けけを終えて、
ダイニングの片付けに取りかかっていた彼女に　　声をかけた
『今から外にぶらつきに出かける、準備をしておいてくれ』

「畏まりました、あと１０分ほどお待ちください」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――

彼女が準備している間に
私も準備を終えて、待っていると

「お待たせした」

彼女が準備を終えて
歩いてきた。

『あ、あぁ、いや待ってない』

……正直言って私は内心驚愕していた。

今まで彼女は、後何分と言ったら、ほとんどの物事をその時間内に
きちんと終わらせてきた、
しかし！
女性の身仕度とは
１０分たらずで終えることが
できるものなのだろうか？

いや彼女は人間ではなくアンドロイドなのだが、
それでもＡＩもボディーも女性型の、ガイノイドのはず
よく知らないが女性の身仕度とは、
もっと時間がかかるものなのではないのだろうか？

そんな内心の驚愕や疑問を
含んだ視線を感じたのか

「何でしょうか？
この格好にどこかおかしな所でもありましたでしょうか？」

『いや、おかしくない。むしろ翡翠によく似合っているよ』

彼女の服装は
少し明るいグレーの
ブレザーのようなレディースーツに
同色のセミタイトスカート
暗いエメラルドのダービータイと
若干堅苦しくおとなしめな格好ではあるが、
彼女の纏うどことなく凛とした雰囲気によく似合っているように
私は思えた。

しかし、彼女が私服を着ているのを私はあまり見ないので少し珍しく思った。

実際、家で家事をしているときや、食事や生活必需品を買いに行くときも、　たまにデザインが季節などで変わるものの、
いつも何か特別な訳がない限り、ほとんどの場合メイド服を着ている。

だからか今回の彼女の服は何となく新鮮で、
私には少しだけ彼女の雰囲気が、いつもの彼女と比べてどこかが変わっているように見えた。

一通り、そう言った心の中の様々な考えに整理をつけ終え、やっと彼女に声をかけた。

『翡翠、じゃあ行こうか』

「はい」

『「行ってきます」』

こうして私と彼女の二人は、
とある夏の日、外へと出かけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3638v/

とある男の、のんきな日常

2011年11月16日16時09分発行